初心もと柏

秋

享保の元さきとりの秋
打おもはゆるあさしもを
市代のうもものかさりおかさ御貢
菊さき草
ものとなく事

松風の賦城さき浪や里稲避田
賦ハ[illegible]の姑雲や風ちりてて

伊波ふくつ世りつれ
を祢ふ穂なる秋なす

風ふ起て素ふ色蘆を縫をり
清水ハ朝速こそや秋風たもらく
うは素を刈り洗ひ

七夕

七くさや酢味噌通まて秋ぬ
星に七種の手向ふ秋きちかの
くくしなり人目のせくはを
酢ふもあくはけ茅ハのうして秋の
花

躍

とうり茅薄ふ鐘をあくを
秋は心のさうふ
綾の女男ふ

玉椿筍親のうらを躍しは
人の親のんのやさきを色

露

ちるものを仕まいや淀の
大ひえ色ぶかあり山の

木槿

賤のをや篠シメシ深よさぶむむ木槿
朝日まちえてきりゝ泪を垣ほく
いよ〳〵花のさかれた

女信子

女郎花うてバ扇のふをしふ
ぬまと打ち忍扇よ香あり
ぬうるゝ

神路山

笑へとの情へや折てめ所也

人情此歌を元とす二神は紀ての

と一色この花はたらて

萩

山萩のちへ行ハ折ちらす

人の庭よりもさうへて宮城野の

おやこ愛スハかりうつるにいと萩さ

行ちらして月の映しをかこそ

自撰五中所収

山城有見くるる鶯あり我も香

他(ヒト)のこゝろ家の中ゝ家あり我から

きゝとい我慢ゝ丸事こゝ所

きゝやあんん見くるる鶯ハ

鶯 敵の

ほうちとてきく

霧

朝霧やさてもいづくの長浜邊

志賀の長浜にて

放下ス目前の海行彼の牛馬牧

忽ニ隱ル今の朝霧ハ眼上の

不二山とのみ地の色沈ム似タリ

けふ山〳〵ハかすみ渡りて見え縁ニ

以ヘ手けふ白このまに清らかう

雜云の一つ是慰ム也

釋氏の詩あて

玉雲ハ掃ふる師乃掟ル

漢城にて

あさ海や雲の中ゆ出る一人

老わらの尾ゝ衣をうけたりう

雲搖の中ゆ出タリとゆるりの

蓑ゆ出てうるおるる海

鳴子

なるこ引二日の月もちらす哉

ちらかるのさひしくすうすもと

追悼

どこへゆくどこへ白露の黄衣

中秋前夜　右ハ書衣澄う月

海ゆきまるとそこ幽霊身の涯

因く傾くして又禅道もうとくに

依古かくこつつ衣の白キハ常

なりしを哉

高野山

何ぼけ栄を寿ぬ秋の暁雲（ヤハカワラ）

書ハ別し稚こる姿なる行ぬ此

後佛と誓ひ法山大ひ暁の雲よハ

亂書もひせらるの

初鴈

後。〳〵はつかさせる鴈の聲
衣うちとうちうちよりう

初月の弓は弦あり一鴈の色

澤邊の鳴のしらゝとゆくを
たゝいて立すゝ鳴ハ衣かし
は鳴ハ月影のしん

十五夜

次麿の秋三日月うゝ来ぬ人ゝ
人〳〵ゝの月をゆんるゝ満月を
ゝゝ次志深ゝゝ

かまやゝゝ次麿の秋
雨月を感じて
ゝゝ次ゝゝ名一四
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

淀みず

名月や淀みをしらぬ水車

きまれる水の別ハ冷まじるを

くるゝ無車を名月のかをる傾キテ

思ふ〻今日秋桂の高月

新月を初湯ふくらし

前栽雨いとやりて今の時雨

庵を題ひと雲那也とるゝ

今の時雨きのふの那なり那也

思ふまゝ唯山は一雲殘るのゝ

廣沢や秋色鹿よ月の声

沈白古やの名ワカフドの若人り

きて廣澤よ秋連ゆくを

十五夜と悟りさとりあるべく
超人又洒脱の大法の志篇が
妹の

いて羽なりし象潟よ旅れて
夜や秋や海士の痩るや鳥頭
五文字なる法皇こゝ下のやハ寂や
寂るるか秋なりしか洗夜の秋さ
よ秋て家ねんこりあるものの
ひとしく乳房やたて法うえハかなの
なくう鶏声赤子に似タリ

きはこゝや稲穂を細の助杭
潟よりして細二丁をとりこの浦も
鳥海山の蜃楼(ミラ)を徑(コリ)の
独掛櫻乃ほとゝりますゝ

田舎
なり

高雄

桑紙の間に紅葉や霜ぐもり

ちるとなくとりをとやめて

冬

初時雨

初時雨舌うつ海膳の味と

欄(ラハシレ)よりて時雨をとゝる酒ありてうに

ありり初海膳風節タリ舌はさぐ俺

清味なり志ゝれの清ゝゝ

それてう新

傘提てちぬ着てむ雨れ
ほ紙を我彩かぬ雲のうえ
しゝ無着うゝやまれぬる
古れうとうりて云村酒面り
そのかさとうしやむ
三千余年一むし都外の
雨人を君ぬ百八十生領
又雨ふう祥子

鳩眠ル冬来ぬるや桔槔
ちゝ必しゝ水たりて
をゝものあり汲人稀ま百鳥も
人すぬ只一鳥又ゝ雨
羈路冬ゝ

火燵ぬて古ゝ寒一星月夜
三ケよゝあつゝり
おもしゝを白のあ汐人汲

いつ百はやうりて都を忘れ
見うしれ関もとゆくすもれん
事なりしわすれて
後の奥行

爐の眠り浪こそきのふに戸明ん
只九華ノ地、豊とをすゐを
あ[illegible]も
美の奥

紡恋

来ぬ人を焼ほ[illegible]を椎の
紡してこぬをかうり盆(ホトキ)
椎のひろ[illegible]
焼中ゆ[illegible]

南京研心北丘を
訪つ

煙の炭農夜もとりや　東岸居

冬椿

ちまたくる花葉くれなゐ　玉椿

洗白きといふ人もあるべし

仏ハ葉みて行家を極めて

花盗とうるさうる冬椿

なるべし

山茶花

さむむる囲(ヲトリ)雪白のゆふへ哉

鄙ひなる鄙の垣根うる玉

一ト籠古絵ハ小菊の淡うり

ちらく日新の乃ふ洗花

剪ス

見消ぬ奥ハさんも崩壊

蓑童の袖をたちひしをれ
伏をうしなかしはねひちのくつき
ふりへて見まいと茅むせさけり
ちてもの花の精魂あらはしるる

石蕗花

空明乃姿二つやはくの花
きぬ〳〵なりあしいロすく花
してわきまゆくを見る折ふ

ゆいつくの花はちりさてもも
ふりの伏ハ定黄ハよ

河邊李千島

暮ゆく妻ゆ爲さてきてちるれ
百ハ洛乃ふんうねとの稽も
更ケ建仁ノ陀羅尼ふとわさ
くてず爲すハ情ハ深

史は新や人まちそぎき細代
行路の東形とこの史とをうち守
人宮ゐて細代ちとはたゐりあり
小象園水鳥行
所ハ堀川乃亭
たつ雪や菅公たちて橘の
形のうちや酒粕人

雪

梅鄙ぶかしは寝て居ん
彼ハ其聖や　不二の味

早梅

折れそういちもの梅の徳ハ何

菅太宰社

奉納

桂折ル尤も可也その極
（序母ヒロ氏寺）
久しきほのの桂もおくらり
氣の毒をとふをてらふ

桂折とハ宮ヨ暴ル事まうてヨ
もちろん折ものハ奇と恰
聖廟の御前をとやしてまつるの

年尾

四十年ハ前東の筆ヨ
ちりしのくもと

貧ヨ悲ん為ハ人ハ歳の暮
昔時清貧の連中師ありてヨ
酒ヲ好ム門人ヨ酒屋ありてわ許ハ
買フ其錢ヲ以てなす事とせし
後ヨ酒をうしに師の欲ッ門人ハ

いよ〳〵貧をたり時はよ貧種酒
いくく霧のつゆをやとしし
かさもてつゝすれ師のいくを
いと安しとひて吾り廬（ムシロ）かさひて
我白すゝまする欲てつものゝをを
このすをは邪なして酒をとる
やうきさんのゆんしありうもれ
せうのめん

白屋は雑る拾ひうり年ぞれ
んのいそうきはかるをへし
拾ひるハ賀く
年をを白我慢は蓄つ白是界
白是界とつ能はり金剛う秘曲て
老品也今のせの我他（ヒト）ハ慢をを
光陰つりていとも老くれ也
家横かの是界坊はひうるふ

并

獨旅行句

おなじ

太平ハ花の敵を吹無世哉

狗ハ駿河ふじこの後の程

山城の三角の瓜つくりとゝり

駿河も瓜かもやこゝ和人瓜ゝの

さゝ懐ゝてゝもるゝ之京

乃代ゝ和くせり春雪れ和ゝ

ある
一文字ちる歩くを在中
浦風もこのかゝ遥れ
きこゝるさゝなるを

ある
枳殻（カラタチ）み荊（ハラ）よ高の奥の奴
志賀一合を嬉しう思
海老さゝ山ゆ垣伸て白ハ山ちなる
ゆ〻しの

ある
制札立て毒うゝなよし
佛さへうる世あり神恵
神罰ハたゝやき事

ある
質つけの油濃（ル）淀のち
細代りかゝ文解（ケイ）て見為
これすゝなり

前句 蓬竹の窓より入る月風

つまんで釜より念仏きこゆる

比丘尼の面影を

前句 市中は塵ふる事即心

小刀鞘巻して鱣乃ひらき鳥

きゝ〳〵おかゑ

前句 雪行ずの乃ゆゑの塵塚

山科の玉子熟柿さく夕鳥

前句 長き東ハ相を移さんひら酒

死なぬ命ぐりつゝを笑

ゆゑ

いてゝ

まれの

ゆゑ

おの
神鳴の卒尔に落てすさ
千貫目ほどの雪ぬけ
ぬ

享保二十酉年霜月上旬

洛陽堀川松葉軒
書肆　今井重左衛門
　　岡村三右衛門

後序

もゝ話しの集い詩賦をもて
赤子を教へ九重乃義を誹
句をもて人ぬけ子を教ゆ
うの性撰花をもて集くもとゝ
と号うの衣笠うちぬ松ぬ
傳うもゝみ書ことの業を初ん

乃二字我冠を除きなり
りの姿者こゝに又云くゝ
斜なるは今をゝて以て頃の帰
らゝなりゝ杯月言
花を祭い天のなる質り
家元来六乃根ゝゝ
耳ありゝ聞口ゝゝ乃ゝ

誹諧ハ世ゝゝ賢愚相共
に恥ゝゝん人乃誓ゝ
を返ゝ作ゝ何を世情者
の為ゝ事を論ゝ
唯風雅ゝ為ゝゝん事ハ朝
に暮ゝ徒ゝ一竜
一豬ゝゝ灯を費やす

行〻子いまゝ芳堂師ハ
向へ城南子

丁酉

仲冬上浣　逸民百丸跋